

中世の注釈・文芸論

——附「古典教材の調査方法概説」——

高尾 祐太

(広島大学)

はじめに

今回紹介したいのは、中世の注釈や文芸論である。それらは、荒唐無稽、牽強附会、闇雲な神秘化などというレッテルを貼られ、長らく研究の対象とすらされてこなかった。近年になって漸く、そうした否定的な見方が変わりつつある。例えば、伊藤正義が記念碑的論文「中世日本紀の輪郭——太平記における卜部兼貞説をめぐって——」（『文学』第四十巻第十号、一九七二年）をはじめ、各所で指摘するように、荒唐無稽とされる中世の言説が、一方で中世に於いて新たな作品を花開かせる地盤となっていたのである。中世の作品を理解するためには、その地盤である中世の言説を読み解く必要がある。長らく光を当てられることなかった中世の言説は、こうして日の目を見ることになった。

金春禅竹（一四〇五—一四七〇頃）を例に具体的に説明したい。禅竹は自らの能楽論に中世の仏教や神道を取り入れていた。特に六輪一露説が有名である。禅竹の能楽論について、「その興味の中心たる中世的附会物を取り払ってみると、禅竹の能楽論は、案外明快で独自性に富んでいることがわかる」（三宅晶子「禅竹の個性」〔同〕『歌舞能の確立と展開』ペリカン社、二〇〇一年、四六五頁）のように、そうした中世の仏教・神道に関する言説は、論理を不明瞭にする不純物として扱われてきた。しかし、そうした知的基盤を無視しては、かえって禅竹の能作品の魅力の本質を見失ってしまうのではないか。詳しくは、二〇二一年四月刊行予定の『アジア遊学』（仮題）宗教芸能としての能楽』に「能《芭蕉》の構想と草木成仏説」と題して掲載予定であるから、そちらを御覧いただきたい。

中世は、一言で言うならば、仏教的な世界観に支えられた時代であった。古典のテクストが解体され、仏教的な世界観の下に再構築されてゆく。その結果が中世の注釈であった。『古今和歌集』・『伊勢物語』・『日本書紀』等、我々の知る古典文学作品が、中世には思いも寄らぬ解釈で読まれていた。それが中世の言説が荒唐無稽と言われてきた要因の一つでもある。

例えば、室町時代後半の一五世紀に、東常縁から宗祇に伝授されたことで知られる古今伝授は、『古今和歌集』の秘伝の伝授を伴う歌学で、近世を通じて堂上の古典学の頂点であったが、本居宣長に痛烈に批判されたことでも有名である。

すべて古今に限らず、伝授と云ふに正説は一つもなし。みな邪なる僻説、牽強付会のことにて、一つも取るに足らず。少し才智のあるもの見では、必ず大きに笑ふべきものなり。(『排蘆小船』、新編日本古典文学全集『近世随想集』小学館、二〇〇〇年、三九六頁)

こうして古今伝授は、他の中世の言説と同様に、長らく等閑視されてきた。この古今伝授が、中世に注釈書や論書を通じて宗派や分野を越えて二次的に享受された仏教の論書、『大乘起信論』的な世界観の下に、『古今和歌集』を再構築する歌学であったことを、かつて拙稿「正直の歌学——古今伝授東家流切紙「稽古方之事」をめぐって——」(『国語国文』第八十七卷第二号、二〇一八年二月)に論じた。

『大乘起信論』と言えば、井筒俊彦が遺作『東洋哲学覚書——大乘起信論』の哲学——(中公文庫、二〇〇一年)をはじめ、「意味の深みへ——東洋哲学の水位——」(岩波文庫、二〇一九年)等、各所で東洋哲学の代表として取り上げ、人間の意識と言語をめぐる問題に関して、今日の哲学的水準に十分堪えうることを示して見せた。古今伝授は、『古今和歌集』の一首一首を、この『大乘起信論』的な世界観の下に正直に読み為し、正直を体現する古典『古今和歌集』として再構築する歌学であった。東常縁から宗祇への『古今和歌集』

の講義は『両度聞書』として残っていて、片桐洋一『中世古今集注 釈書解題三下』(赤尾照文堂、一九八一年)に翻刻されている。

同時代に活躍した連歌師心敬もまた『大乘起信論』の世界観に基づく連歌論を構築し、実作にも貫いていた(拙稿「ささめごと」の連歌論——中世の言語観と文芸——)(『国語と国文学』第九十八巻第二号、二〇二二年二月)。言語に対する反省的思惟からなる心敬の連歌論は、今日の詩論にも引けを取らない。心敬の名著「ささめごと」は日本古典文学大系『連歌論集 俳論集』(岩波書店、一九六一年)に収録されている。

このように、荒唐無稽と言われていた中世の言説にも実は中世なりの論理があり、中には今日の哲学的水準に堪えうる知的基盤が共有されていたのである。

ところで、今日の古典嫌いの言い分はささずめ、「現代においてそれを学ぶ意義が見いだせない」(日本学術会議 言語・文学委員会 古典文化と言語分科会『提言 高校国語教育の改善に向けて』二〇二〇年六月三〇日、一二頁)と言ったあたりであろうか。だとすれば、今日の哲学的水準に堪えうる知の体系を具える、古今伝授の『両度聞書』や心敬の連歌論「ささめごと」は、古典嫌いの加速する現状を打開する教材としての可能性を秘めてはいないだろうか。

今日、古典に限らずテキストは一般的に、作者の意図へと遡源する志向の下に読まれてるように思う。テキストに浮かび上がる作者——それ自体幻影に過ぎないのであるが——、その一点に向かって解釈が一元化されてゆく。近現代の古典の注釈はまさに一つの読みへと収斂させてゆく作業であった。そうしたテキストの読み

方の延長線上にこそ、現代語訳を暗記するだけの古典の授業が成り立つように思う。このあたりの問題意識については、小峯和明編『日本文学史 古代・中世編』（ミネルヴァ書房、二〇一三年）参照。

一方、中世に於いて、テキストはあらゆる意味可能性に向けて開かれていた。例えば、『平家物語』の一部の写本に付属する「剣巻」には、王権の正統性を象徴する三種神器の宝剣が、壇浦の海底に沈んだことが描かれる。その謂わばテキストの表に描かれた物語世界の背後に、「風水龍王」という語をメルクマールにして、衆生が悟りに至るプロセスが透視できる可能性を論じたことがある（拙稿「『平家物語』「剣巻」の密教的転換——風水龍王をめぐる——」（『国語と国文学』第九十七巻第一号、二〇二〇年一月）。このようなテキストの意味可能性の重層性については、先述の拙稿「能《芭蕉》の構想と草木成仏説」にも触れたところがある。併せて参観を請う。

中世の注釈書が、時に自覚的に古典のテキストを自らの思想体系の下に読み為す背景には、こうしたテキストに多様な読みの可能性を認める言語観があったのではないかと考えている。

もちろん、テキストに一つの正しい読みを探究する近現代の研究や古典教育を批判したいわけではない。多義的なテキストの読みを示す中世の注釈が、近現代の古典の読み方を相対化し得るものであることを言いたいのである。古典のテキストの正しい読解を志向する授業は、当然不可欠だと思う。その上で、現代において学ぶ意義を見出せるような生きた古典にするために、中世の注釈書を通して古典を読み返してみたり、文芸論を読んできたりして、古典文学に多角的なアプローチを試みる、といった授業も面白いのではないか。

その際、中世の注釈書や文芸論には注釈書が完備していないものも多い。そこで、本稿の附録として、「古典教材の調査方法概説」を付した。元よりこの附録は、これから教職を目指す学生のためのものであるが、纏めて話す機会もない為ここに採録した。とは言え、近年急速に発展する電子データベースなどの情報は、学校現場で教えている先生方にもきつと役立つことだろう。必要に応じて参看を請う。

附「古典教材の調査方法概説」

はじめに

調査方法に困った時の一覧表として利用することを想定し、なるべく簡便なものになるよう、列挙する調査ツールと解説は最低限に抑えている。本稿を通じて初めて知ったツールは是非この機会に一度使ってみて、どのツールを使えば何がわかるのかを記憶の片隅にでも入れていただければ、いざという時にそれらが助けてくれることと思う。

なお、何れのツールを利用する際にも、凡例をよく読んで使用することを強く推奨する。

一、作品に関すること

- ・『日本古典文学大辞典』全六巻（岩波書店、一九八三～一九八五年）
 - ・『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）
 - ・『俳文学大辞典』（角川書店、一九九五年）
 - ・『平家物語大事典』（東京書籍、二〇一〇年）
 - ・『お伽草子事典』（東京堂出版、二〇〇二年）
 - ・『仏書解説大辞典』全二五冊（大東出版社、一九六四～一九八八年）
 - ・『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版、一九九八年）
 - ・『日本古典籍総合目録データベース』（国文学研究資料館）電
子資料館内
- まず当たるべきは、『日本古典文学大辞典』であろう。やや古く、情報がアップデートされなければならない所もあるが、最も基本的な、古典文学全般に関する辞書である。他にも、ジャンルや作品に特化した辞書をいくつか列挙した。中でも『平家物語大事典』は、『平家物語』に隣接する諸領域をも扱った大作で、『平家物語』以外にも有用である。また、中世の文学は仏教抜きには語れない。仏書に関する基本的な事項は『仏書解説大辞典』・『大蔵経全解説大事典』を参照されたい。

日本古典籍総合目録データベースは、全国の日本古典籍の書誌・所在を収録した『国書総目録』を引き継ぐもので、作品の諸本の所

在や、複製・活字翻刻の有無等の情報を収載している、現在も更新中のデータベースである。また、画像が公開されているものや、複写依頼が可能なものもある。この日本古典籍総合目録データベースは、国文学研究資料館のホームページ内の「電子資料館」のコンテンツの一つである。国文学研究資料館のホームページには、他にも有用なデータベースが数多く収められているので、古典に携わるのであれば一度はアクセスしてみたい。

二、語句の意味

- ・『日本国語大辞典』第二版全一三巻＋別巻（小学館、二〇〇〇～二〇〇二年）
- ・『角川古語大辞典』全五巻（角川書店、一九八二～一九九九年）
- ・『時代別国語大辞典 上代編』（三省堂、一九六七年）
- ・『時代別国語大辞典 室町時代編』全五巻（三省堂、一九八五～二〇〇一年）
- ・『大漢和辞典』修訂第二版全二巻＋索引＋補巻（大修館書店、一九八九～二〇〇〇年）
- ・『漢語大詞典』全二巻＋附録・索引＋訂補（上海辞書出版社、一九八六～一九九四年）
- ・中村元『仏教語大辞典』上・下巻＋別巻索引（東京書籍、一九七五年）

『日本国語大辞典』は用例の初出を掲げる方針（初出主義）を採っ

ている。また、古辞書の表記を一覧できる表記欄も何かと便利である。私が普段よく使う辞書はその他に、『角川古語大辞典』や、各時代に特化した『時代別国語大辞典』あたりである。但し、辞書も一つの見解に過ぎない。決して辞書に示された意味を鵜呑みにせず、複数の辞書を見比べ、用例に当たって検討するのが良い。辞書に掲載された用例以外を検索する方法は、索引の節にて紹介する。

また、漢文資料を読む際や、漢字の意味や訓みを調べる際には『大漢和辞典』と『漢語大詞典』を参照している。漢籍の用例検索についても、索引の節にて紹介する。

三、人物について

・『国史大辞典』全一四卷＋一五卷上・中・下（吉川弘文館、一九七九～一九九七年）

・『平安時代史事典』本編上下＋資料・索引編（角川書店、一九九四年）

・『和歌文学大辞典』（前掲）

・『国書人名辞典』全五卷（岩波書店、一九九三～一九九九年）

・『日本古代文学人名索引』全六冊（望稜舎、一九八九～一九九七年）

『国史大辞典』は古いが最も基本的な辞書であろう。場合に依じてその他の辞書も使い分けて欲しい。また、新訂増補国史大系に所収されている以下の二つの史料も有用である。

・『尊卑分脈』（新訂増補国史大系『尊卑分脈』第五八～六〇巻

下、吉川弘文館、一九六六～一九六七年）

・『公卿補任』（新訂増補国史大系『公卿補任』第五三～五七巻＋別巻一、吉川弘文館、一九三四～一九三九年）

『尊卑分脈』は使用するのに吟味が必要な史料であるが、系図・呼称・人間関係をざっと調べるのに有用である。『公卿補任』は公卿を歴任した人物の経歴を調査するのに利用する。他に『僧綱補任』・『国司補任』・『藏人補任』などの史料もある。

四、その他の事項について

・『大日本地名辞書』増補版全八巻（富山房、一九六九～一九七一年）

・『有職故実大辞典』（吉川弘文館、一九九六年）

右の辞書の他に次の三冊も紹介したい。

・和田英松著・所功校訂『官職要解』（講談社学術文庫621、一九八三年）

・石村貞吉著・嵐義人校訂『有職故実』上・下（講談社学術文庫800・801、一九八七年）

・浅井虎夫『女官通解』（講談社学術文庫670、一九八五年）

何れも文庫本サイズで、手元に置いておくといざという時に便利である。

以上、書籍を中心に基本的な調査ツールを紹介してきた。調査学習を取り入れるのであれば、これらの図書が学校に所蔵されていることが望ましいが、学生の皆さんが赴任した学校に、これらの本が

揃っていない場合は、最低限、『日本古典文学大辞典』・『日本国語大辞典』・『角川古語大辞典』・『大漢和辞典』・『国史大辞典』あたりは揃えていただきたい。

五、索引

本節では、電子データベースに絞って紹介してゆきたい。電子データベースの中には、ジャパンナレッジや古典ライブラリーの日本文学 Web 図書館等、有料のものもある。何れも個人契約と法人契約で年会費が異なる。生徒にも使えるように学校で導入するのであれば、法人契約ということになるが、導入が難しい場合が多いのではないか。そこで、ここでは無料で公開されているものに限定して紹介してゆく。

- ・ 日本古典文学大系本文データベース (国文学研究資料館 HP 電子資料館内)
- ・ 史料編纂所データベース (東京大学史料編纂所)
- ・ SAT 大正新脩大蔵経テキストデータベース (SAT 大蔵経テキストデータベース研究会)
- ・ 漢籍電子文献 電子文献資料庫 (台湾中央研究院)
- ・ 中国哲学書電子化計画

普段よく使うのは大体このあたりだが、これらは現在公開されているもののほんの一部に過ぎない。今日、データベースの世界の進歩は著しい。それらは EACS (East Asian Classical Studies) 国際協働による東アジア古典学の次世代展開——文字世界のフロンティアを

視点として——のホームページ内「Reference」に国内外のデータベースのリストとリンクが掲載されているので、そちらで最新の情報をチェックしていただきたい。科学研究費助成事業のプログラムで、数年毎にホームページの名称も変更されるため、ブックマークしておくことを推奨する。

右に紹介したものの内、日本古典文学大系本文データベースについて補足しておく。本データベースは、岩波書店が刊行する日本古典文学大系 (通称、旧大系。新日本古典文学大系ではない) の全文検索ができる。但し、学術研究利用を条件として公開しているため、アクセス可能な場所が限定されていることに留意していただきたい。アクセスできる場所は、①大学・短大以上の高等教育機関 (国内外)。②公的研究機関。③図書館、美術館、博物館、文書館。④学術文化事業に関する公的研究機関、の四つである。

なお、電子データベースには誤植もあるため、これらを使う場合、できる限り検索結果をもとに直接本で確認するのが良い。また、研究論文の検索にあたっては以下の索引がある。

- ・ CINI Articles
- ・ 国文学論文目録データベース (国文学研究資料館 HP 電子資料館内)
- ・ 国立国会図書館オンライン

CINI Articles が最も基本のデータベースであるが、論文雑誌以外に収載された論文は検索されない。著書や論集に収載された論文は国文学論文目録データベースでは検索できるなど、それぞれでカバーする領域が異なるので、これらを併用して論文を探すことになる。

論文雑誌についても査読誌をいくつか紹介しておきたい。

上代文学（上代文学会） 中古文学（中古文学会） 中世文学（中世文学会） 近世文芸（日本近世文学会） 国語と国文学（東京大学） 国語国文（京都大学） 美夫君志（美夫君志会） 和歌文学研究（和歌文学会） 軍記と語り物（軍記・語り物研究会） 説話文学研究（説話文学会） 和漢比較文学（和漢比較文学会） 仏教文学（仏教文学会）

その他に興味深い特集を組む雑誌として、近年刊行が始まった、『日本文学研究ジャーナル』（古典ライブラリー）も紹介しておきたい。